

「水海道小学校」という学校のありかた

1. 『希望に輝いていたころ』

最近我々は、近々発行される茨城県水海道小学校の創立 130 周年の記念誌の草稿を見る機会を得た。そして、その中のひとつの文章に、かつてないほどの感動を覚えた。それは、卒業生のひとりが当時(昭和30年代後半)の学校における活動の様子を書いたものである。『希望に輝いていたころ』は、彼女がこの水海道小学校ですごした時代の思い出の記につけた表題である。

『希望に輝いていたころ』によると、当時の水海道小学校における日常の活動やさまざまな行事は、その運営のかなりの部分を児童が中心になって行っていた。放送、新聞、購買、図書、映画、保健、体育、整備、防護、貯蓄の10の部と、それらを統括し全校集会の準備をする事務局があり、5年6年は必ずそのどれかに入って活動をしていた。それぞれの部は、おおよそクラスから4, 5人ずつ、30~40人ぐらいで構成されており、どの部に入るかは、各自の希望を重んじ話し合いで決めたという。

放送部には朝風放送局、そよ風放送局の2つの放送局があり、朝風の校内放送を交替で担当。取材を基にした校内ニュースや放送劇まで自由な発想で番組作りが任せられ、それらの準備や放送機器の操作にいたるまで一切を子どもたちが行った。新聞部には「あかつき新聞」「わかさ新聞」の2つの新聞社があり、週1回の新聞発行と、低学年向けの壁新聞を作っていた。その他、学校生活に必要な小物類を販売する購買部、図書館の本の貸し出しや整理を行う図書部、保健活動や応急処置を行う保健部、花壇の管理や校舎の美化を担当する整備部など、そのそれぞれで子どもたちの活動は驚くほど自主的に行われていたのである。

放送部に所属していた彼女は、昼の放送を終わって誰もいない廊下を教室に走って帰るそのときが、人生で一番充実していたときだったと述懐している。

2. 自分に自信を持っている子どもたち

私たちがいなかったら学校は成り立たなかったと彼女は自信を持って言う。運動会は、用具の準備、競技の進行、児童の誘導など概ねが体育部にゆだねられ、体育部が中心となって運営されたと彼女は書いている。プログラム作りも4年以上の学級代表からなる学級委員会が行っており、まさしく子どもたち主体の運動会であったといつてよい。

子どもたちの気持ちは、いかに、みんなのために活動するかということに向かっており、協力し合って学校生活を運営し、環境の改善をする、行事を計画し推進していくことに意欲と快感を持っていた。そして、それを実現していく中で、成長し自分たちに自信を持っていったのである。

子どもたちが自主的に運営する、それは大変難しいことである。子どもたちに任せればできるというものではない。そこにいたるまでには、水海道小学校の先生たちには並々ならぬ苦勞があった。いろいろな意見のまとめかた、仕事の分担のしかた、具体的な個々の仕事のしかた……。それをやらせるというのでなく、子どもたちが自分たちでつかんでいくように計画し、場を作り、助言する。子どもたちは、そうした先生たちの支えを意識することなく、その手の上で自由に生き生きと活動したのである。

3. 子どもの知恵と行動力を発揮させる場としての学校

水海道小学校では、教科の学習においても子どもたちの主体的な活動を通じて、自ら考え行動する力を育

てることを目標とした。教師が教え込む受動的な学習ではなく、自分のペースで、自分の五感を通して、個々の子どもが思考を積み上げていく学習を工夫した。理科は、単に覚える学習ではなく、教材は考えるための材料であり、みずから考えて法則を見出していくための材料であるとし、それを実現するための実験観察中心の学習活動を設計した。機を失せず実験観察ができるようにとのねらいで作った「実験観察園」や「大きな機械と道具の実験室」、子どもたちが自由に機械の分解組み立てや実験・工作ができるように材料工具をそろえた「発明工夫室」。また社会科では、教員全員で地域に即した課題と学習のありかたを5年間にわたって研究し展開した。(水海道小学校の活動は当時大変注目され、「蠅のいない町」(岩波映画),「私たちの学校」(新理研映画)などの映画にもなっている。)

子どもたちにとって、学校をどういうものにするか、学校で何を育てるか、その方向はこの水海道小学校の示す方向ではないか。子どもたちに自分の知恵と行動力を発揮させる場、協力して目標に向かう場としての学校づくり、それを考えていくということではないか。

もちろん、当時と今とではさまざまな条件が違う。当時できたことが今そのままできるとは限らない。活動のテーマも同じではないだろう。小学校、中学校、高校、それぞれで、また地域によってもその内容は違うだろう。子どもたちが、自分の現在の生活、将来の目標とつながりを感じるテーマ、それを見出し学習の場を作り出すのは容易ではない。しかし、それに向かって、試みては修正していくという地道な努力が、我々大人世代に課せられた課題ではないだろうか。教育の効果は、2年や3年でその効果が出てくるというものではない。信念をもって、じっくりとして取り組む姿勢が必要である。

(研究開発部 矢口みどり)

JADEC ニュース 71 号 (2007/3) より